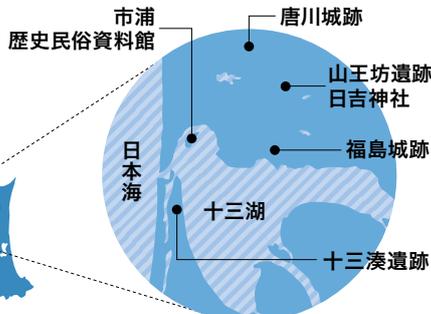


AOMORI



十三湊遺跡



十三湊・津軽安藤氏 略年表

13世紀初め	十三湖の前潟沿いに湊町が形成(十三湊の誕生)。北条義時、安藤五郎を蝦夷管領に登用
文永5(1268)年	蝦夷反乱、蝦夷管領安藤五郎戦死
嘉元4(1306)年	北条貞時、藤崎護国寺に梵鐘を寄進(弘前長勝寺に現存)。安藤氏など津軽の得宗被官の名が刻まれる
元応2(1320)年	出羽蝦夷蜂起
元亨2(1322)年	安藤氏の乱勃発、蝦夷管領安藤又太郎季長(本抛折曾関)と安藤五郎三郎季久(本抛内真部)が争う
正中2(1325)年	北条高時、蝦夷管領を安藤季長から安藤季久に改替。季久、又太郎宗季と改名(安藤氏惣領下国家の祖)
正中3(1326)年	安藤氏の乱に鎌倉から征討軍派遣、安藤季長捕縛
嘉暦3(1328)年	安藤氏の乱、和談により終息
建武3(1336)年	南北朝内乱始まり、安藤氏は足利方につく
14世紀半ば	安藤師季(宗季の子)、本抛を十三湊に移す
応永元(1394)年	北海夷狄動乱、安藤康季・鹿季(師季の曾孫、盛季の子)鎮圧に功あり、康季は蝦夷支配者の地位を認められ、鹿季は秋田湊に入部、湊家の祖となる
応永30(1423)年	安藤陸奥守(康季)、新将軍義量就任の賀として鷲羽・ラッコの皮・昆布など北方の産物を献上
永享4(1432)年	安藤盛季・康季、南部氏に敗れ蝦夷ヶ島に没落。翌年、幕府の調停で復帰
永享8(1436)年	安藤康季、後花園天皇の命で若狭羽賀寺再建に着手
嘉吉2(1442)年	安藤盛季・康季、南部氏により再び十三湊を追われ、翌年小泊から松前に没落
文安4(1447)年	若狭羽賀寺本堂再建なり、落慶法要
宝徳3(1451)年	安藤義季(康季の子)、津軽鼻和郡大浦郷に侵攻
享徳2(1453)年	安藤義季、南部勢に攻められ津軽鼻和郡狼倉館で自害。安藤氏惣領下国家断絶
享徳3(1454)年	安藤一族潮瀧家の安東師季、武田信広ら、下北大畑より蝦夷ヶ島に渡る
康正2(1456)年	湊安東惟季(堯季)、安東師季を秋田小鹿島に迎え、河北郡に入部させる。この年、蝦夷ヶ島志海苔村でアイヌ蜂起、翌年、コシャマイン蜂起起こる
応仁2(1468)年	安東師季、熊野那智社に旧領回復を祈願。その後将軍義政に謁見、下国家後継者と認められ政季と改名
文明2(1470)年	安東政季(師季)、津軽回復をめざし藤崎城を攻撃
長享2(1488)年	安東政季、森山飛騨守の謀反により糠野城で自害
明応4(1495)年	安東忠季(政季の子)、出羽国檜山城を本拠とする。(檜山屋形の誕生、近世大名秋田氏の祖)

※津軽の「安藤」に対して、秋田湊や檜山の安藤は「安東」を名乗った。  
資料提供/齊藤利男

講師：齊藤利男氏



昭和25年、茨城県生まれ。東北大学大学院文学府研究科修了。弘前大学教育学部講師、助教授を経て、平成9年より教授。現在、弘前大学名誉教授、弘前学院大学特任教授。著書に『平泉』(単著、岩波新書)『北の内海世界』(共編著、山川出版社)など。



深まる一冊

十三湊遺跡～国史跡指定記念フォーラム～  
前川要・十三湊フォーラム実行委員会編  
(六一書房)

1991～93年の国立歴史民俗博物館の調査以来、14年にわたる発掘調査で解明された十三湊遺跡の実像を詳しく紹介する一冊(2006年刊)。



AOMORI

# 青森

第5回 第1部

## 十三湊から解き明かす 北の中世史

豪族・安藤氏の盛衰と辺境支配



2019.7.6(SAT)13:00

# とさみなと 十三湊から解き明かす北の中世史 豪族・安藤氏の盛衰と辺境支配

十三湊遺跡は、しじみ漁で有名な十三湖の西岸に位置する。周囲には遺跡が多い



## 1 姿を現した幻の港湾都市 塗り替えられた十三湊の姿

1991年に始まった十三湊の本格的な発掘調査は衝撃をもたらした。十三湊は鎌倉時代から室町時代にかけて繁栄した北の交易港だが、国内屈指と謳われた港湾都市の存在は文献上の



十三湖の北岸に残る福島城跡。十三湊時代最後の安藤氏の壮大な居城跡

記録にあるのみだった。長く謎のベールに包まれていた十三湊の実態が、ようやく明らかにされたのである。しかしまた、その後の発掘調査により、当初の十三湊の姿が大きく塗り替えられてもいる。初めの調査で提示された復元図は、大土塁と堀が町を南北に仕切り、北側に領主である安藤氏や家臣の居館、南側に庶民居住区が配された形になっていた。安藤氏が十三湊に本拠を置いていた時代を通じて、この町割が形成されていったと考えられたのだ。ところが調査が進むにつれ、大土塁と堀で仕切られた2つの区画は、安藤氏の盛衰を物語る異なる時代の十三湊を示すことが明らかになっていったのである。

## 2 本州北端の豪族・安藤氏 明らかになったその実像

十三湊を本拠とした安藤氏は、謎の多い豪族である。出自もあいまいなら、支配していた領地の範囲も明らかではなかった。講師の齊藤利男氏は近年、これまで不明瞭だった安藤氏一族の姻戚関係や所領を、文献研究により解き明かした。安藤氏の所領は、下北半島

十三湊安藤氏の全盛期を実現した伝・安藤盛季(もりすえ)の木像(写真提供/五所川原市教育委員会)



から陸奥湾沿岸の外ヶ浜、そして十三湊を含む津軽半島全域におよぶ。また、安藤氏は鎌倉時代には「蝦夷管領」となり、室町時代には「日の本将軍」と呼ばれる異例な豪族だった。同時代に奥羽は鎌倉公方と奥州・羽州探題の管轄下にあったが、安藤氏はそれには属さず、室町将軍直属の地位にあった。その役割は称号の通り、本州北辺と蝦夷地の統治にある。安藤氏は、名実ともに辺境の支配者だったのである。



十三湊遺跡から出土した信楽焼の茶壺。十三湊遺跡からは、国産の瀬戸・珠洲焼や中国産の舶載陶磁器が大量に出土している

## 3 廃絶へ追い込まれる十三湊 蝦夷地開発と安藤氏の盛衰

現在、十三湊の成立は13世紀初めと考えられている。それ以前も、安藤氏は陸奥湾沿岸の外ヶ浜を拠点として北方交易を行っていた。津軽半島西岸の十三湊を、もう一つの新たな拠点としたのは、日本海交易の隆盛にともなうものと見られる。また、青森各地や道南の考古学的調査が進むにつれ、北方交易の様子も次第に明らかになってきている。一般に蝦夷



十三湊で安藤氏が栄えた14世紀中頃～15世紀中頃の大規模な宗教遺跡とされる山王坊遺跡

地という、江戸時代後期に始まるものと思われているが、実は鎌倉時代の末期以降、商業開発が盛んに進められていたのである。当時の主力産品は昆布、干し鮭、干し鮑。道南各地に和人の村ができ、一大生産拠点となっていた。その富によって安藤氏は強大な勢力を形成し、14世紀に十三湊は全盛期を迎える。一方、この蝦夷地開発が、所領を接して対立する南部氏との確執を深めていくことになる。15世紀中葉に十三湊が廃絶し、幻の港湾都市となる背景には、蝦夷地の利権をめぐる争いがあったのだ。